

A Study of Embouchure Teaching for Trumpet Beginners

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23369

トランペット初習者のアンブシュア指導について

松中 久儀・楠 景二*

A Study of Embouchure Teaching for Trumpet Beginners

Hisanori MATUNAKA & Keiji KUSUNOKI

緒言

今日、中学校や高等学校におけるブラスバンド活動は音楽科教育の一環として、ほぼ定着したと言える。近年のブラスバンド活動の傾向として注目すべきことは、構成部員の女子生徒の占める割合が高いことである。フルートやクラリネットのような小型の木管楽器については早くから女性の演奏家は多かったのであるが、近年では楽器の改良、体力の向上、社会事情の変化等が要因となってホルンやトランペットの女性奏者も増えている。中学校や高等学校におけるブラスバンドではこの傾向は更に強く、バストロンボーンのような、大型の低音金管楽器も女子生徒が担当していることも珍しくない。このような今日から指導の対象は女子生徒が中心になってくる。金管楽器は奏者の唇が音源になっており、唇の適切な形状の保持、空気圧のコントロール、マウスピースの保定の適否等がその後の上達の度合いや、音色に直接影響する。従って初期段階では、正しいアンブシュアの習得に注意を払わなければならない。本稿では高校1年女子生徒2名の事例を中心にトランペット初習者に対するアンブシュア指導の方法について考察していく。なお、本稿に記す音名及び楽譜はすべてin B-flatである。

1 アンブシュア (embouchure) の定義

“アンブシュア”は口あるいは入口を意味する仏語 bouche を語源とし、音楽においては通

常、大まかな捉え方ではあるが管楽器に当てる唇の形をさす。しかし、金管楽器と木管楽器とでは演奏時の唇の形状と機能は大きく異なる。木管楽器においては有簧と無簧とに、更に有簧を複簧と単簧とに分けて見ていかなければならない。このように厳密には楽器の種類によって演奏時の唇の形状・機能を細かく区別しなければならぬのであるが、今日、それらを普遍的に捉えようとして幾つかの定義が提唱されている。Philip Farkas (1962)^①は「口、唇、顎、頬の筋肉を正しく協力し合うように緊張した形に整えて、唇にマウスピースを当てて息を吹き込むと、気柱 (air column) が振動するようにすること」と定義している。Maurice M. Porter (1967)^②の定義は「正しい指導によって管楽器のマウスピースに当てた唇と口の形状、あるいは演奏者が特定のマウスピースについて実際に用いているかまたは開発した唇と口の形状」というものである。前者の定義は機能を中心に捉えているのに対し、後者は形状中心であると言える。いずれの定義もほぼ正しいのではあるが、実際に演奏家が「アンブシュアが良い。」といったような表現をする場合に指している内容とは若干のずれがある。多くの場合良い音で鳴っている時の唇、顎、頬の筋肉の状態や、気柱が振動しているということ、更に良い位置に、良い角度でマウスピースが当てられていることまでを含んでいる。西岡信雄 (1965)^③が訳者注として述べている「管楽器の奏法を解

*石川県立鶴来高等学校教諭

説する時に常に使われるフランス語のアンブシュア (embouchure) という単語は、それに適切な日本語をさがすことが非常にむずかしい。なぜならば、アンブシュアということばは、けっして単に口 (mouth) とか唇 (lips) とか歯 (teeth) などを総称する具体的な名詞ではない。むしろその楽器を演奏するために奏者の口 (または唇、歯、舌など) がある特殊な機能を持たされた状態を呼ぶ抽象的な名詞である」の一節はアンブシュア概念を正しく表しているものに最も近い。これら3者の定義から、演奏中の唇の外形のこと、唇や周辺の器官が良く機能しているということ、木管・金管の双方を包括していなければならないことをも含め、改めて、次のように定義した。「楽器を演奏するために、奏者が唇、歯、舌などを正しく協働させ、マウスピースを当てて息を吹き込むと、気柱が振動するようにすること。」

Ⅱ アンブシュア指導の要点

合理的に機能するトランペットのアンブシュア習得のために P. Farkas⁽⁴⁾ は次の4点を留意すべきこととして挙げている。

1.唇は自然に閉じ、両端は軽く微笑んだ状態で少し左右に引く。

2.唇中央は力を抜き、ほんの少しすぼめる。

3.下顎中央は平たくし、半円形の浅い凹みを作る。

4.マウスピースは唇の上下左右の中央に軽く水平に当てる。

なお、1～4の結果として上唇と鼻の間は内側からの空気圧により柔らかな膨らみとなる。これらの内容は生徒が部活動において上級生の経験による助言を手がかりに、試行錯誤を繰り返しながら独習に近い形で習得することは不可能ではない。しかし、マウスピースを唇中央からほんの少し外れた位置に当てなければ演奏できないとか、高音を出すのにマウスピースを強く唇に押しつけてしまうといった悪習慣を身につけてしまい易い。こう言った悪習慣を一旦身につけてしまうとそれを取り去ることは困難であり、又、比較的早い時期に壁に突き当たること

が多いことから最初に正しい指導をする必要がある。今回2人の初習者に対して、前述の5点を中心に個別指導を行ったのであるが、特に留意した2点について触れておく。2の「唇中央の力を抜く」ことは中山富士夫(1981)⁽⁵⁾が明るい音色を得るために重要な事として次のように述べている。「管の内部の空気を軽くじゅうぶん振動させるためには、唇も軽く振動しなくてはなりません。唇を軽く自由に振動させるために『唇の中央は締めずによく弛め』吹き込まれる空気のまにまに自由に動くようにしておかなくてはならないのです。」さらに中山は学校バンド経験者に音色の暗い者が多いことの理由として高音を出すために「唇を左右に強く引きすぎること」、「息の量のコントロールに依らないで、唇中央を小さく絞り込むことに依ろうとすること」を挙げている。このような奏法がしばしば見られる背景には比較的短期間のうちにある程度の高音を奏さざるをえないという学校バンド特有の事情があったことは否定できないものと思う。今回の指導においては、決して無理な高音を要求せず、唇の形状の観察から左右の引きすぎにならないように、又、中央部の絞り込みをしすぎないように十分な注意を払った。次に4の「マウスピースを水平に軽く当てる」点であるが、この「水平に当てる」ことは D.A.Dale (1965)⁽⁶⁾らも『望ましいこと』として挙げてはいる。しかし、P.Farkas⁽⁷⁾が良いアンブシュアの例として挙げている奏者たちの写真を観察する限り何人かについては必ずしも水平に当ててはいない。ほんの僅かではあるが下向きである。楽器をトランペットに限定しなければ、ほんの僅か下向きに当てる奏者はさらに多い。こういった実情から「水平に当てることは望ましいが、ほんの僅か下向きであっても構わない」との指導方針を採ることとした。「軽く当てる」ことの重要さは古くから指摘されているところであり、いかに圧力を加えないで高音を奏するかが曲芸的に競われた時もあった。M.M.Porter⁽⁸⁾は「1953年の無圧法による演奏のレントゲン写真」を紹介している。ここでの無圧法とは全く圧力をかけないという意味ではな

く極めて小さな圧力しかかけない、ということである。具体的には、楽器を紐で吊し手を触れずにかかなりの高音を奏するというものであるが、実際にはとても楽音として通用するものではなかったことをPorter自身述べている。このような音楽的に意味の無い減圧は特別な例であるが、明るい音色と跳躍音程の技術を獲得する手だてとして、マウスピースを必要以上に押さえつけないということは、今日でも重要な指導のポイントとなっている。今回の指導でもこの点を特に考慮し、練習課題の音高は g_4 までに押さえた。 a_4 以上の音が出てくる場合は不自然にならない範囲で1オクターブ下げるか新たに編曲するという手だてを採った。

Ⅲ マウスピースの選定

マウスピースの諸元はカップ径、カップ容量(カップ深淺)、スロート径、リム幅、リム内縁形状、バックボアからなる。この内、カップ径は一般に数値表示されており、選定の際の最も有力な判断材料となっている。演奏家の間で最もよく使用されているV.Bach社を例にとると、そのマニュアル[®]によれば最大カップ径17.00mm、最小径15.00mmでその差2.00mmである。この幅内に0.02~0.50mmの変化幅で、カップ径の違いのみで18サイズ、カップ容量とリム幅の違いも含めると76サイズがラインナップされている。これらの中から初習者が自分で適当なものを選び出すことは至難のことであり、まずは音を出して演奏に参加しなければならないという事情から貸与された楽器に付属のマウスピースをそのまま使い始めることも多いようである。ここにも初習者のつまずきの原因が潜んでいると言える。事例の対象とした両生徒が、当初使用していた、楽器に付属のマウスピースのカップ径は16.70mm[®]であった。この値をV.Bach社の数値と比較すると、最大径である17.00mmと2番目に大きい16.50mmのほぼ中間に値し、欧米人成年男子の、かなりの経験を有する奏者が使用可能なサイズであり、本邦の女子高校生にとっては大きすぎるサイズである。このようにカップ径が大きすぎる場合、容易に発音できる

ことから当初は良いように思えるのだが、やがて、 a_4 あたりの少し高い音を出さなければならなくなると強く押し付ける方法に頼らざるを得なくなってくる。こういったリスクを避けるためにもマウスピースの選定は慎重に行われなければならない。諸元の変化方向と、音色、音質の変化方向と唇に及ぼす影響は経験則から次のような傾向があるとされている。

1. カップ径

大きいと音量が増し、豊かな音が得られる反面、唇が疲れやすくなる。小さいと唇の耐久性は増すが大音量は得られない。

2. カップ容量(深淺)

容量の小さい(浅い)カップは音色は明るくなるが、響きに深みがなくなる。逆に、カップ容量が大きい(深い)と音色は暗くなるが豊かな響きになる。

3. リム幅

リム幅が広いと唇の耐久力を増す反面、唇の柔軟性を制限し跳躍音程の演奏が困難になる。薄いリムは唇の柔軟性が高くなり広い音域を奏することができるが唇は疲れ易くなる。

4. リム内縁形状

丸い内縁は音程のコントロールが容易になるが高音域の発音が困難になる。丸みの少ない縁はアタックが明瞭になる。

5. バックボア

細く徐々に広がるバックボアは音全体が安定するが、息の抵抗感が増す。すぐに広がるバックボアは豊かな音量と十分な響きが得られるが息の抵抗感が無くなり、音のコントロールが難しくなる。

使用者の唇の左右幅、上下の厚み、表皮の質感、上下の門歯の大きさを観察し、大まかには中央値の16.00mmを基準に、身体的諸要素が小さければ小さいカップ径のものを、大きければ大きいものを選択の対象とすればいい。希望する音色・音質から諸元の変化方向を組み合わせて適切なものを選定していく。今回、生徒Aにはカップ径16.20mmのもの(V.Bach-7C)を、生徒Bには、15.70mmのもの(V.Bach-11C)を選定した。

IV 事例報告

1. 生徒A

- (1) 1年女子、身長165cm
- (2) 使用楽器：B-flat管 (Besson 610)
- (3) 使用マウスピース
 - a. カップ径 16.70mm (Besson-7C)
 - b. " 16.20mm (V.Bach-7C)
- (4) 期間 平成6年6月～12月
- (5) 指導経過

6月20日

両手による正しい楽器保持の仕方を説明し、口元までの楽器の上げ下げを数回行う。マウスピースはまだ付けていない。腹式呼吸による息の吸い込みと、一定速度での吐き出しをする。20～30分の反復練習で要領は把握できたようである。マウスピースを取り付け、両手と口の3点で楽器を保持してみる。この最初の接触感が後のマウスピースを当てる位置に大きく影響するので慎重に行う。少し笑ったように軽く唇を左右に引かせ、そのまま細く息を吹き出すように少し中央をすばませる。下顎は半円形に平坦となり不自然な皺はできていない。良い形である。この状態を保たせながら唇の中央に僅かに下向きにマウスピースを軽く当てさせる。これを数回行い感触を記憶するようにさせる。この状態が崩れないことが確認できたので舌先を唇裏側に当て、小さな種を吐き出す要領で軽く息を吹き込ませる。3回の試行でc₄の発音に成功する。初習者用の教則本⁹⁾から練習課題(譜例1)を指定し、この後数日間mfで繰り返し奏することを指示する。

6月23日

前回の課題はまだ十分に奏することができない。唇の形の崩れを予防するねらいで、前回の課題を中止し、a₃～f₄のロングトーンを新たな課題とする。唇、顎の状態は良い。(写真1～3)しかし、音色に若干明るさを欠く。この後期末考査による部活動休止に伴い欠席がちとなるので、折りをみて練習を再開するよう声をかける。音色に明るさが欠けているのは適切なアプローチが得られていないためと考えられる。原因にカップ径が大きすぎることが考えられた

ので確認した。前述のとおり16.70mmと大きすぎることが判明したので小さいものに変更することにした。

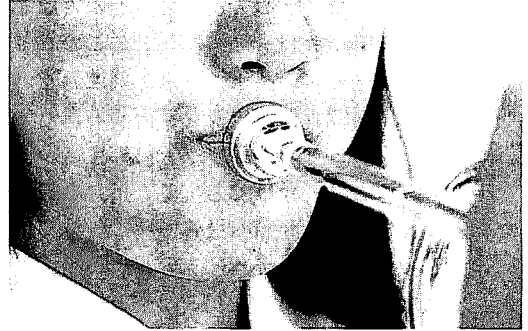


写真1

生徒A

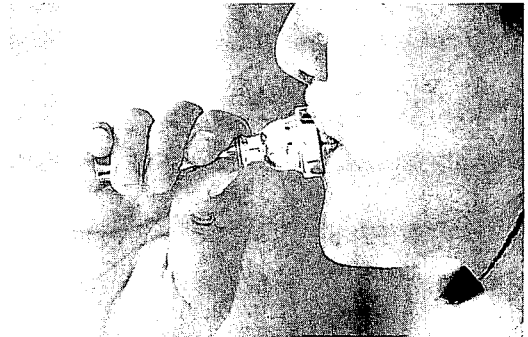


写真2

生徒A (側面)



写真3

生徒A (リング使用)

8月8日

マウスピースをカップ径16.20mmのものに変更する。新しいマウスピースに慣れることと、明るい音色を獲得させることをねらいとして、中山富士夫による譜例2¹⁰⁾の課題に取り組ませることにした。

8月9～11日

夏季休業に伴う合宿練習に参加。g₃～g₄のロングトーンを中心に練習を行う。文化祭のプ

プログラムの一つである「my way」の3rdパートとして合奏練習にも参加する。これについては a_4 を越える音が無いように指導者が手を加えたパート譜を使用させた。8月下旬より学校での部活動を再開するが、欠席がちとなる。欠席が長引く前に練習に参加するよう声をかける。

9月5日

練習再開。今までは、本生徒が一人で練習してきたことを指導者がチェックするという方法を採用してきたが、一人で練習することの単調さに対する不満を訴える事から、指導者もユニゾンで合わせることにした。本来ならば学習者の欠点が判断しにくくなるので好ましいことではないのであるが、ここでは、そういったマイナス面よりも学習者が音質のまずさを気にすることなく課題に取り組めるとともに、出来るようになっていく満足感を重視した。この日は指導者と共に譜例2-1～2-7を練習した。

9月7日

譜例2-8～2-9を筆者と共に練習する。マウスピースを変更した効果が現れはじめたようであり、各課題をスムーズにこなしていくことが出来る。

この後、2学期中間考査に伴う部活動休止も終わり練習を再開するが欠席がちとなる。

10月29日

譜例2-9_b～2-9_cを数回の練習でクリアする。約1ヶ月間のブランクがあったにもかかわらず唇の形の崩れは見られない。良い形が固定したものと判断した。今後の練習方針を派生音のフィンガリング習得、タンギングの明瞭化、正確な音程判断のための耳の訓練、音域の拡張をねらうものに切り替えることにした。

2. 生徒B

- (1) 1年女子、身長150cm
 - (2) 使用楽器：B-flat管 (Besson 610)
 - (3) 使用マウスピース
 - a. カップ径 16.70mm (Besson-7C)
 - b. " 15.70mm (V.Bach-11C)
 - (4) 期間 平成6年5月～11月
 - (5) 指導経過
- 5月31日

マウスピースのみによるバズィング練習から入るべきであったが、早く楽器を持ってみたいという気持ちが強いため、本生徒の希望を尊重し、簡単に持ち方の説明をし、構えの練習に入った。左手によるヴァルブ部の保持、右手小指のマウスパイプトリガーへの引っ掛け、同親指のマウスパイプの下側からの支えを習得させ、両手による楽器の上げ下げを何度も行わせる。両脇を絞りすぎるので意識的に少し脇を緩めるよう指導する。楽器を構えるというよりは両手で持ち上げているという状態になってしまい、若干不自然さが残る。楽器が重いと訴えるので休憩させる。休憩後、マウスピースをつけ発音練習に入る。前述の生徒Aと同じ要領で行う。しかし、マウスピースを当てるまでは良い形なのだか、当てて息を吹き込む時には下顎に桃種状の小さな凹凸の皺が出来てしまう。唇の外形だけに注目していると見逃してしまう程度であるが、しかし、明らかに小さな凹凸が出来ているのが観察される。これは下唇に不自然な力が入っているためである。マウスピースを外し、下顎を良い状態に戻し、再度当てて息を吹き込ませる。発音に成功するが、下顎の小さな凹凸は出来たままである。音も低くペダルトーンに近い。唇をもう少し強く左右に引くように指導する。唇の筋組織が柔らかいタイプのものであり、このことが下唇の力の入れ過ぎと音程の低下を招いているものと推察された。 a_3 ～ d_4 の低音のロングトーンの反復練習によって唇筋力の強化をはかり、改善していくこととする。ロングトーンと併せて譜例1の課題を練習していくことを指示した。この後、折りを見てロングトーンの練習状況をチェックする。 $\downarrow=60$ で6拍が限度である。音程は安定せず、終わりの方が下がり気味となる。本人もこの点については自覚しているがうまくコントロールできない。

6月23日

アンブシュアのチェックをする。一見良好のように見えるのだが、下顎の軽い小さな凹凸は無くなっていない。(写真4～5) 門歯を注意して観察すると、上の2本が少し前にせり出している。このためマウスピースを当てた時、下

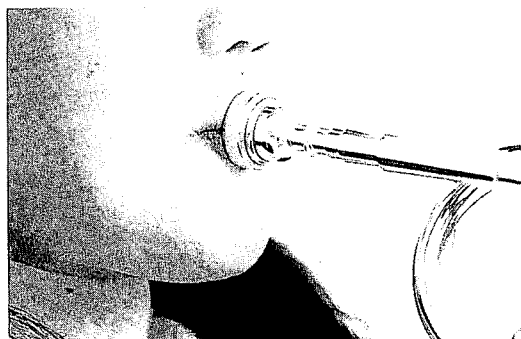


写真4 生徒B

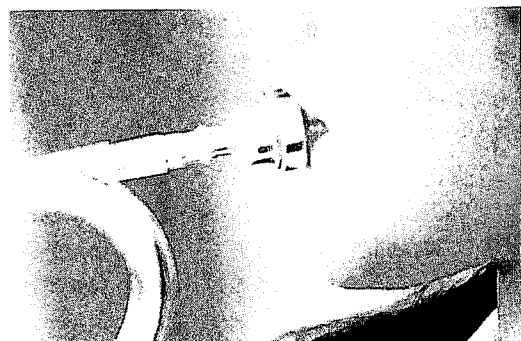


写真5 生徒B（側面）

門歯が一段退いた形になり、下唇でのマウスピースの支えが弱くなってしまい、これを補おうとして力が入ることから桃種状の小さな凹凸ができてしまうものと推測された。あまり好ましいことではないがマウスピースを当てる角度を今までよりも更に下向きにすることで下唇の支えを強くすることにした。1学期末考査に伴う部活動休止の間に、マウスピースのカップ径の確認を行った。生徒Aと同様、大きすぎることが分かった。本生徒は体格もやや小柄であり唇も小さい方であることを考えれば現用のマウスピースのカップ径は大きすぎたといえる。もっと早い時点指導者が気付かねばならないことであった。

8月8日

本生徒の体格、唇の大きさを考慮しマウスピースをカップ径が標準的サイズよりもやや小さめで、明るい音色が期待できる、15.70mmのもの（V.Bach-11C）に変更した。この日は譜例2-1～2-2の課題をクリアーする。

8月26日

ロングトーンで $c_4 \sim g_4$ が出せるようになる。

しかし、まだ音の末尾は下がり気味でる。唇を中央に寄せ過ぎているので、もう少し左右に引くように指示する。強く左右に引くと高音は幾分出しやすくなるのだが、音が瘦せてしまうので好ましいことではない。しかし、まだ許容の範囲内であると判断した。

9月9日

生徒Aと同様、課題をクリアーしていく満足感を得させるねらいで、指導者もユニゾンで伴奏をする。譜例2-3～2-6をクリアーする。

9月12日

$c_4 \sim g_4$ のロングトーンを行う。 $c_4 \sim f_4$ は音程も不安定にならず、ほぼ一定の音高を保つことができるようになった。 g_4 はまだ不安定さが残る。上達のペースは幾分遅い。下顎の小さな凹凸は残ったままである。トレーニングリングによるアパチュアの観察では不自然な状況はみられない。（写真6）

この後、しばらく欠席が続く。練習の単調さを訴えるので、変化を持たせるため簡単な2重奏曲を用意した。

10月5日

本生徒用に低音部を書き加えた2重奏曲⁹⁹（譜例3、4）を指導者と共に合わせる。3度のインターバルがうまく出来ない。しばらく練習を休んでいたことによる唇の柔軟性の不足によるものと思われた。



写真6 生徒B（リング使用）

10月24日

$c_4 \sim g_4$ のロングトーンを♩=60で8拍ずつ行う。 g_4 の音程を保持することが出来ない。楽器が十分に鳴っていない音色であることから、息の量と、吹き込む速さが要ることを説明する。

なるべく多く息を吸い込み、かなりの速さで吐き出してしまうようにすると g_4 も音程を保つことができた。現段階では唇の筋力によって a_4 以上の音を出していくことは困難であるであろうと思われたのと、明るい音色を獲得させるねらいで速い息の流れで高音を出すように指導した。

10月25日

前日と同様、ロングトーンの練習を行う。速い息の吹き込みによる奏法の効果がみられ、音程は確実に安定してきている。暫く反復練習していると、唇の痺れ感と共にマウスピースとの接触面の痛みを訴える。マウスピースを押しつけ始めたかと判断されたので、一旦休憩させ、今後、出来る限り押さえる力を抜き、息の流れで音程をコントロールするよう指導した。

10月28日

$c_4 \sim g_4$ のロングトーンを自主的に練習している。音程が下がらないよう留意しているようである。タンギングの要領も把握できたようであり、鳴り出しが軽い破裂音になってきている。しかし、音色はまだ暗い。マウスピースから唇をはずすと下唇の充血が観察された。これは発音の主体が下唇であることを示している。下唇が発音の主体になっている場合、丸みのある音色で明るさに欠けることが多い。この点については改善の必要があると判断した。マウスピースを当てた時、上唇と下唇が合わさる線がマウスピース中央よりも、僅かに下方にきているのが観察されたので、改善の第一歩としてマウスピースを当てる位置を、少し下方にずらし両唇の合わさる線をマウスピース中央より僅かに上方になるよう指導した。

10月29日

a_4 を出そうとするがうまくいかない。音階を奏しながら、勢いで出すことを試みる。 $c_4 \sim a_4$ を $\downarrow = 60$ で2拍ずつ鳴らしていく。2回目で a_4 を出すことができたが、音色は明るくはない。

11月7日

高音域への音域拡張が出来ないことから楽器の転向を希望してきた。発音の主体を下唇から

上唇に変えることが本生徒にとっては困難なことのようにであった。本生徒の希望を尊重しテナーサク스에 転向、1ヶ月半後の定期演奏会にも、2nd パートとして参加することができた。

V 考察

1. 生徒A

本生徒は良好なアンブシュアの習得に成功した例と言える。12月中旬での音域は $g_3 \sim c_5$ であり、初習者の6ヶ月の練習成果としては十分な広さである。音色も明るく、タンギングに伴う雑音の混入も少ない。このような成功の理由として次の諸点が考えられる。

(1) 最初にマウスピースを当てることを非常に慎重に行ったこと。この作業は白紙にスタンプを押すことと心情的に似ている。一旦誤って押してしまうと、後からの修正は不可能ではないが非常に困難である。時期的には生徒Bよりも20日後であり、すでに生徒Bの下顎の小さな凹凸の問題が出ており、そう言ったこともあって慎重に臨んだことは否定できない。

(2) これは先天的な要因であるが唇の形、唇の肉質、歯並びのいずれもが、この楽器の演奏に向いているものであったこと。又、指導者の指示に柔軟に対応しようとする性格の素直さも成功への潜在的な一因になっているものと考えられる。

(3) 初めに使用していたマウスピースのカップ径が大きすぎることに、比較的早い時期に気付く、マウスピースを押し付ける悪習慣が身につく前に適切なカップ径のマウスピースに変更できたこと。

(4) 単独練習の単調さを軽減するために指導者のユニゾン伴奏を取り入れたたり、早い時期に無理な高音を演奏させないために、既製の合奏パート譜の一部の音高を下げるなどの工夫をしたこと。

本生徒は指導記録からも分かるが、練習に関しては勤勉で継続的に取り組むタイプではなかった。練習を続けさせるために、しばしば指導者の方から、声をかけなければならなかった。

又、指導者がユニゾン伴奏をするという練習形態は親切そうに思えるのだが、生徒を依存的にってしまったことは否定できない。声をかければ練習に来るという状態がこの一面の現れと思われる。親切にしながらも依存的にならないよう、又、信頼感を失うことのない一定の心理的距離を保ったスタンスを取っていくことが大切であると考えられる。

2. 生徒B

本生徒は結果的には良いアンブシュアの習得に成功しなかった例といえる。マウスピースを最初に当てることに関しては、決して慎重さを欠いていたわけではないのであるが、下顎の桃種状の小さい凹凸を取り去ることができなかった。換言すれば、下唇の不自然に力みを取り去ることができなかった、ということであり音程の不安定さや音域拡張が困難であった原因は主にここにあったものと考えられる。これらの原因としてつぎの2つのことが考えられる。

(1) 上門歯2本が歯列から少しせり出しており、この2本でマウスピースの圧力を支えてしまい、その結果、下唇の押さえが弱くなり、これをカバーしようとすることから下唇に不要な力が入っていたと考えられる。歯並びが悪いにもかかわらずプロの演奏家として成功している例は確かにある。そういった人達は人並み以上の練習の積み重ねと、アンブシュアの保持に細心の注意を払うことで成功している。しかし、歯並びが悪くても、努力で必ずしも演奏できるようになるとは限らないことを認識する必要があった。D.A.Dale⁹⁾も門歯4本の重要さを次のように述べている。「理想的には、トランペットを吹くのに少なくとも4本の均整のとれた前歯が必要である。しかもこの4本の前歯は、マウスピースの基盤になるのであるから、できるかぎり正方形でしかも平らであることが望ましい。」本生徒は決して歯列が不揃いであるといった印象ではなく、注意して観察すれば上2本が少しせり出しているのが認められるという程度であった。努力によりカバーできる範囲との判断であったが、指導者の予測の甘さは否定できないものと思う。

(2) マウスピースのカップ径が大きすぎることに気付くのが、本生徒にとっては遅かったこと。指導記録からも分かるが、本生徒の練習開始は生徒Aよりも20日早く、このことは適切なマウスピースへの変更が20日遅れたことと同義である。不適切なマウスピースの使用によって身につけてしまった演奏上の悪習慣を根気強い努力によって克服していくことは不可能ではないが、それには相当の熱意を持って臨まねばならず、又、そうしても成功する保証はない。このようなリスクを回避する意味からも出るだけ早期のマウスピースの適否の判断は重要であると言える。この点からも本生徒に対する判断は遅すぎたとの批判があってもやむを得ない。

VI まとめ

今後のトランペット初習者に対する指導留意点を次のようにまとめることができる。

1. 最初にマウスピースを唇に当てることは慎重に行うこと。少しでも具合の悪い点があれば徐々に改善しようとはせず、その時点で一旦中止し、しばらくの期間を置き、再度、初めて試みる気持ちで臨むようにさせること。発音させることを急がず、良い状態でマウスピースが当たっている感触を記憶させることを重視すべきである。

2. 唇と上下門歯を注意深く観察し、適切なカップ径のマウスピースを初めの段階で選定すること。マウスピースを短期間で取り替えることは上達のさまたげになり、好ましいことではないことは、殆どの指導書で述べられていることである。カップ径をはじめ、カップの深淺、リム幅、などは中庸のサイズの場合、肉眼ではその差異は殆ど判別できない。諸元不明のマウスピースを使用させ、不具合が生じてから変更することは避けるべきである。従って、諸元の明らかなマウスピースを、指導の方針を考慮し、慎重に選定すべきである。

3. 門歯の形状と歯並びは、大切な適性の一つとして見るべきであるということ。本人の希望も十分考慮しなければならないが、好条件でない場合、安易に、努力でカバーできるような発

言はず、努力に見合うだけの成果が得られない場合もあるということを、十分に説明しておく必要がある。又、門歯の形状や歯並びが原因で壁につき当たっていると考えられる場合、速やかに、方針変更を勧めてみることも必要であろうと考える。

今回、「息の吐き出し」の問題については触れなかった。初習者にとっては良いアンブシュアの習得が最も重要な課題であるとの我々の見解と、指導内容が込み入るのを避けたためである。しかしながら著名なトランペット奏者の多くは唇のテクニックよりも息の吐き出しのテクニックの重要性を指摘している。又、A.H.Benade (1987)⁹⁰はトランペットの音高と楽器内に送り込まれる空気圧の関係を測定し「高い音ほど強い圧力がある」と報告している。空気圧を単位時間内に送り込まれる空気の量と速度との関係で捉えることができるならば、量が多いことは有利な条件として働く。従ってアンブシュアに問題が無ければ送り込むことのできる空気量、一般で言う肺活量は無視できない問題として浮上してくる。生徒A、B、及び指導者の肺活量(5回計測の平均値)は次のとおりである。生徒A:3.49ℓ、生徒B:2.42ℓ、指導者:4.44ℓ。これらの数値と併せてロングトーンの音程保持や高域への音域拡張の状況を振り返ってみると、「息の吐き出し」も重要な譜例1

条件として考慮する必要があると考えられる。この点も含めた指導の方法と内容の検討は今後の課題としたい。

Ⅶ 引用文献

- (1), (4), (7) Pilip Farcas, 「金管楽器を吹く人のために」(北村源三他訳), 1973, パイパーズ, p. 7, p.10~27, p.30~31
- (2), (8) Maurice M.Porter, 「アンブシュア」(大室勇一・荒木雄三訳), 1967, 全音楽譜出版社, p.8, p.27~29
- (3), (6), (14) D.A.Dale, 「トランペットのテクニック」(西岡信雄訳), 1965, 音楽之友社, p.28, p.42, p.30
- (5), (12) Band Jornal臨時増刊, 「レッスン&プレイ金管編」, 1981, 音楽之友社, p.73, p.75
- (9) Embouchure and Mouthpiece Manual, 1983, Vincent Bach, p.9~16
- (10) Besson社日本代理店であるビュッフエ・クランポン社の実測公表値
- (11) First Division Band Method, 1967, Boosy & Hawkes, p.6~7
- (13) Arban's Complete Conservatory Method for Trumpet, 1936, Carl Fischer, p.191~192
- (14) A.H.Benade 「楽器の科学」(安藤由典訳), 1987, 日経サイエンス社, p.43~44

譜例 2

This musical score, titled '譜例 2', is written for guitar in standard tuning and 4/4 time. It consists of six systems of staves, each beginning with a treble clef and a common time signature 'C'. The first four systems (1-4) are marked with a mezzo-forte 'mf' dynamic and feature a simple harmonic accompaniment of quarter notes. System 1 has a melodic line of quarter notes on the first string (E4, E4, E4, E4, E4, E4, E4, E4). System 2 has a melodic line of quarter notes on the second string (F4, F4, F4, F4, F4, F4, F4, F4). System 3 has a melodic line of quarter notes on the third string (G4, G4, G4, G4, G4, G4, G4, G4). System 4 has a melodic line of quarter notes on the fourth string (A4, A4, A4, A4, A4, A4, A4, A4). System 5 is marked 'mf' and contains a complex melodic line with slurs and fingerings (0, 2, 0, 2, 2, 1, 2, 1) and a rhythmic accompaniment of eighth notes on the first string (E4, E4, E4, E4, E4, E4, E4, E4). System 6 is marked 'mf' and contains a complex melodic line with slurs and fingerings (3, 2, 3, 2, 1, 3, 1, 3, 1, 3) and a rhythmic accompaniment of eighth notes on the first string (E4, E4, E4, E4, E4, E4, E4, E4).

The image displays a series of musical exercises for trumpet, numbered 7 through 9i. Each exercise is written on a single staff in treble clef. Exercise 7 is in common time (C) and consists of five staves of music, each with a repeat sign. Exercises 8 through 9i are in 3/4 time and consist of two staves of music each, also with repeat signs. Exercises 9a through 9i feature various rhythmic patterns, including eighth and sixteenth notes, and some include triplets. Exercise 9i specifically has four triplet markings at the end of the second staff.

譜例 3

LOVING, I THINK OF THEE.

Andante.

Krebs.

Musical score for 'Loving, I Think of Thee' in C major, 4/4 time. The score consists of three staves of music. The first staff begins with a piano (*p*) and *dolce.* marking. The second staff includes a *mf* marking. The third staff includes a *p* marking. The music features a mix of eighth and sixteenth notes, with some rests and dynamic markings throughout.

譜例 4

AMERICA

And^{te} maestoso.

Musical score for 'America' in B-flat major, 3/4 time. The score consists of three staves of music. The first staff begins with a piano (*p*) and *ben sostenuto* marking. The second staff features accents (>) over several notes. The third staff concludes with a double bar line and repeat dots. The music is characterized by a slow, grand tempo with a focus on sustained notes and rhythmic patterns.